

《満州事変80年》

座談会「私の中の満州は今…」

出席者 長戸紀次郎 藤森 孝一 古海 建一
八島 継男 橋本 公佑 馬場 永子 (発言順)
(司会 編集部)

まえがき

今年の9月18日は1931年の満州事変から満80年になる。その10年後が真珠湾だから、こちらは70年で、その4年後に日本は焼け野原となって、「15年戦争」に負けた。今にして思えば、その結末は必然であった。当時の日本の国力、日本を取り巻く情勢のいづれから見ても、あれ以外の結末は考えられない。

満州事変は国策ではなかった。時の若槻禮次郎内閣のあざかり知らぬところで計画され、実行された。しかし、関東軍のこの独走は国民の「歎呼の声」に押されて、翌年、満州国の建国となった。そして戦いを計画した人間たちとは別に、新国家の建設に理想を見出し、あるいはそこに生活の根拠を求めた人々がいた。これらの人々は「結末」において大きな悲劇を味わうことになるのだが、そこにいたる体験は今なお各個人に定着している。

80年という歳月は長い。定着した記憶も人間とともに姿を消してゆく。せめて今に残るそうした記憶を形にしておくために、この座談会を開いた――

(編集部)

――まず皆さんと満州との関わりから――

長戸紀次郎

父親が日ロ戦争に従軍したのが始まりといえ



始まりだが、私が小学校6年の時に満州事変が始ま

り、日本軍が鉄兜をかぶって戦うのを新聞で見て、毎日胸を躍らせていた。名古屋の高等商業に進んだが、そのころ満州では5カ年計画とか新しい経済政策を実施していると知り、満州の高等文官試験を受けて、官吏の養成機関である「大同学院」へ満州国官吏として入学し、昭和16年の4月末に満州へ渡った。王道楽土建設の一端を担おうと行ったわけで、大同学院は8か月で卒業して政府の経済部へ入り、昭和20年の終戦まで在籍していた。

藤森孝一

私は信州の山猿で、いづれ

どこかへ出て行かなければならないなど思っていたところへ、諏訪の中学の先生から満州の「建国大学」の話聞き、昭



和13年に建
国大学を受
験した。新
しい国を造
るのだとい
うことで建
国大学。中

身は日本人が半分、あとは今で言う漢族、当時は満州族、それにモンゴル人、ロシア人など。それが宿舍を共にして勉強するんだと聞いて、非常に興味を持った。右も左もわからないながら、ともかく新しい国を造るために勉強してみようということを受験した。

そして14年の3月、2期生として、年齢でいうと17歳10ヶ月。内地からの学生50名が東京へ集って研修を受けた後、4月6日に新京（現・長春）へ着いた。われわれの宿舍は「塾」と呼ばれ、それが12棟あった。1期生が6棟、1棟には23、24名の学生が収容された。そこで初めて外国人の学生と顔を合わせた。5年弱そこにおいて、昭和18年12月に学徒動員となり、関東軍に入隊。20年の8月15日はハルビンの近くの安達というところで、輸送中の列車の中だった。というわけで、満州では大学で勉強しただけで、実際の仕事はしなかった。

古海建一

私は昭和8年に満州で生まれた。戸籍謄本には「満州国新京市満鉄附属地にて出生」とある。父親は大蔵省の役人で、昭和7年に満州国ができた時に、各省から派遣されたうちの1人だった。その後、幼稚園だけは鎌倉だったが、それを除いて終戦・引揚げまで満州にいた。終戦時は小学校6年、ソ連の戦車がくるというので、私は8月12日に新京を離れて、結局、朝鮮との国境の町、安東（現・丹東）に着いた。2日後には母も南に向かい、偶然、安東で再会することができた。安東では天秤棒をかついで豆腐を売ったりしていたが、翌年の2月には新京へ戻った。父親の消息を確かめるため、また、安東は共産党の支配下にあつて、引揚げが遅くなると言われていたからだ。戻る途中は、国共内戦で両軍が対峙しているところを越えた。戻った新京では国府・八路の市街戦なども経験した。また小学校の先生が塾を開いて、なにがしかの勉強もできた。そして終戦翌年の9月に葫蘆島（引揚者の乗船地）経由で、日本へ帰ってきた」

八島継男

私は昭和9年に満州で生まれた。父は当時の東京外語の支那語科を



出て、東亜学院という学校でしばらく留学生に日本語を教えるから満州に渡っ

た。そして奉天（現・瀋陽）市警務庁（警察）に勤めた。その後、父は満州国の役人の道を終戦までずっと歩んだ。それで私も父の転勤のたびに各地を転々とした。新京、ハルビン、綏芬河にもいたし、小学校1年は牡丹江だった。小さい時、家に王さんという爺やがいた。この人は私が小学校2年のときに亡くなったのだが、一人っ子の私はいつも王さんと一緒にいたので、私の中国語はこの王さんの中国語だ。

小学校4年の時、父は北滿の延寿県というところの副県長になった。ところがここには日本人学校がなかったために朝鮮人学校に通った。当時の朝鮮人学校の授業は全部日本語、週に一回、朝鮮語の授業があるだけだった。その時間が来ると私は一人で校庭で遊んでいた。しかし、それでは何かと具合が悪いというので、私一人だけ日本に帰されて、母の実家が東京にあったのでそこに身を寄せ

た。それがあって、後に孤児となっても東京へ帰ることができたのだが、そのうち戦況が悪化して、東京では疎開が始まったので、私はまた満州に戻った。

終戦は5年生の時、ソ連軍がどーっと入って来た。まず男が拘束され、ついで女子どもも移動させられ、海林というところへ連れて行かれた。寒くなる子どもはどんどん死んで、毎日のように遺骸を埋めに行った。そのうちソ連軍もわれわれを養いきれなくなって、「お前たち勝手にどこへでも行け」と言われ、行くところもないので、また延寿県に戻った。その後しばらくは平穏だったが、そのうち国共内戦が始まった。内戦といっても、中国人が中心のうちは国民党も共産党も皆知り合いだったのでよかったのだが、朝鮮人民義勇軍が入ってきて、情勢は一変した。



橋本公佑 私も昭和9年3月、新京特

別市で生まれた。本籍のある港区役所の戸籍簿本には「満州国新京特別市新

発屯政府聚合住宅に於いて出世と新京駐在総領事から送付入籍」と記載されている。父は第一高等学校から東大文学部と京大法学部を経て昭和7年に大同学院に1期生として入学し、卒業後、その教官をへて満州国官吏への道を進んだ。私は3歳の時に大連にいた記憶があり、大連ではタンカトン幼稚園に通った。その時の同期生が日本の新宿高校同期生にいた。大連では祖母に連れられて市内のスケート場や、バスで旅順の203高地に見学に行った。その後、父の転勤に従い、安東、撫順、本溪湖、延吉を経て新京に戻り、白菊小学校に入学した。古海建一氏と同学年だ。

昭和18年の春、父は家族を母方の祖母の故郷である福島県棚倉に移動させた。終戦を予想していたのであろうか。しかし、そこで弟を亡くした上に、田舎は紙と木の家、炭火による暖房、トイレの相違もあり、カルチャーショックを受け再び満州・新京に戻った。朝鮮海峡を渡る時には、巡洋艦の護衛があり、上空には航空機の護衛、太平洋戦争も敗色が濃くなりつつあった。

新京に戻り白菊小学校4年生となったが、軍事色が強く、小学校も国民学校と改まり、男子のみのクラスとなった。6

年生の夏休みの8月15日、正午の玉音放送で敗戦を知った。經濟部専売総局副局長だった父は専売局の家族は移動しない方針を採ったため、関東軍、満鉄などの情報に振り回されて逃げ惑うことの悲劇から免れた。その後、父は身を隠した。私もしばらく知人宅に預けられた。自宅に戻ってからはさまざまな人と同居した。母はピストルを隠し持っていた。隣家は満人の暴徒に襲われた。国家の権威失墜の最初の体験であった。

新京にはソ連軍に続き蒋介石軍が進駐し、その後八路军が攻めてきた。迫撃砲弾と機関銃の音の中、窓の下の腰壁より低く身を屈めて過ごした。集中暖房だったステイムは止まり、ペチカを造り暖房としたが、衣食住には不自由を感じなかった。親しい友を訪ねて遊んだが、流れ弾の尾を引く音も慣れると恐ろしくな

い。昭和21年7月、南新京駅より無蓋貨車にホロをかけて南下し、葫蘆島にしばらく留まった後、博多に上陸した。

馬場永子 私の父は満州で軍隊を除隊になったけれど、日本へ帰りたいくないというので、そのまま満州で憲兵隊に入り、そこで日本から母を嫁に貰った。



私は昭和11年1月、吉林省吉林市で生まれた。その頃は吉林で子どもが生まれるのはとても珍しかったらしく、吉林中の日本人からお祝いを貰って、6畳間がいっぱいになったと聞いた。翌年、弟が生まれた時は、そんなことはなかったから、12年には日本人の子どもが生まれるのは珍しくなくなったのかもしれない。子どもが2人できたので、匪賊討伐など危ない仕事をするのはやめたほうがいいということ、父はある人の紹介で「協和会」（官民一体の国民教化組織）に囑託で入った。

昭和15年に紀元2600年の提灯行列が吉林でも行われた。ところがその日、父は帰ってこない。仕方がないので母は隣家の人と行列を見に行ったら、父がトラックの上で太鼓を叩いていた。母は怒った、「踊る阿呆に見る阿呆、太鼓叩きのマルボウケ（マール）」と言って。4歳だったがよく覚えている。

その後、吉林から通化省金川県に行き、私が国民学校へ入るので安東へ行っ



前列左から2人目が馬場永子氏

た。安東の次は昂昂溪（チチハルの南）、最後はチチハルから引揚げてきたから、新京も奉天も全然知らない。

——そこで当時、満州国というものをどう意識していたかをうかがいたい、若い頃に。

馬場 子どもだから友達と遊べればい

けれど、正直なところ、ここは満州だとか、周りの人たちが何国人だとか、意識することはなかった。日本のことを内地と言ひ、日本人どうしでは「お国はどちら」という会話はしていた。しかし、敗戦が近づいてくると、いわゆる「満人」たちが「あんたたち負けるよ」というように平気で言い出した。それで日本は負けるのか、とわかった。

はっきり覚えているのは、敗戦の翌日、8月16日に街で「八路軍募集」という広告を見て、父に聞いたたら、「それは共産軍だ」と教えてくれた。でも16日に子どもが一人で街を歩けたのだから、それほど緊張してはいなかったように思う。

チチハルではすぐ日本人会をつくり、難民対策として駅の近くに住民を集め、また地方からチチハルに出てくる人たちのため、住居、衣類などを集めた。9月20日以降、ソ連軍の調査があり、協和会職員、警察官、憲兵などが全員連行された。戦後になって住んでいた「天斎寮」という建物では6畳一間に2世帯くらい入れられた。開拓団の男手のない世帯はどうやって暮していたのか不思議だった。とにかく1年間生きていたわけ、日本人会でお金を集めていたから、今の

生活保護費みたいに働けない世帯にはお金を配っていたのかと思う。私も街で煙草を売ったり、お茶を売ったりした。

でもチチハルの北にあった開拓団の人たちは本当に大変だった。終戦後、皆さん、チチハルを目指して歩いて来たが、男の人は全員召集されて、35歳以下の人はいない。生めよ増やせよの時代だから、子どもも多い。5人くらいは普通だった。母親が赤ん坊を早く手放さないと、まずその子が死亡、次は2、3歳の子が死亡、その次は母親が死んでしまう。その上の子が小学校3年生くらいになっていると、大人について歩いて来た。その間の5、6歳から小学校1、2年くらいの子どもはついてこれなくなり、地元の人が助けて育ててくれたのが残留孤児になった。

橋本 成長の過程の中では、自分の国には日本人のほかには満州人（朝鮮人、ロシア人は少数）がいるのは自然だという認識だった。父母が育った日本があることもごく自然に理解できた。ただ日本についての認識不足に気がついたのは、引揚げの際、博多港で労働者に女性もいるのを見つけた時だった。満州国では労働者は満州人であり、労働者に日本人はい

ないと思っていたからだ。

昭和史の根底には「満州」があったといわれる。それほどその存在は大きかったのだろう。ロシアに対する防衛線、資源国、人口流出先としての意義があった。昭和7年の満州国建国、12年の日中戦争、16年の太平洋戦争を経て敗戦を迎え、満州国は13年で亡国となった。国民的熱狂が軍の暴走を止めることを不可能にしたのである。建国2年後に生まれ、満州国で育った者として、満州国についてはごく自然に環境を含めすべてを受け入れていたのが正直な所である。

八島 私の場合は満州が自分の国だと思っていた。子どもは周囲に同化するから、父の周りにいる中国人にお年玉を貰ったりしても、そういうものだとなんかの不思議もなかった。

終戦前後で覚えているのは、朝鮮人の子どもは私から離れていったが、中国人の子どもはそうではなかったこと。また、終戦前に国民党員の一斉検挙があり、わが家の主治医を含めて周りの中国人の大勢が捕まった。副県長の父親はこれらの釈放を一生懸命、上部に働きかけていたようだったが、いよいよ終戦となった時に、彼らを自由に処分してよ

しいという命令が来て、父親は全員をすぐに釈放した。

そして8月15日が来て、他の県ではすぐに国民党の「青天白日旗」が翻ったのに、延寿県では掲げられなかった。父親は「自分に遠慮しているんじゃないか」と、国民党の幹部に「別に遠慮しないでくれ」と言ったら、青天白日旗が上がった。こういうことがあった。

古海

生まれて育って、だんだんに物



心がついてくる過程で、回りは日本人だけではないし中国語も聞こえてく

る。それが自然なのだと思えていた。一方で日本に祖父母がいたり、親戚がいたりすることも当然意識にあった。君が代も知っていたし、自分は日本人だと思っていた訳で、事実上、二つの国を受け入れていたということなのだろう。

終戦は安東で迎え、そこで玉音放送も聞いた、雑音が多くてわからなかったが、回りの大人が泣き出して、「ああ負けたんだな」と思った。安東では豆腐を

売ったりしていたが、日本人だということとで、腕力の強い子供たちに商品をこわされたり、殴られたりしたこともある。同じと思っていた人たちがなぜこんなに変わるのか不思議な感じがしたが、日本の統治時代への恨みを考えれば、不思議ではないと悟ったのは後のことだった。

——藤森さんと長戸さんは子どもではなく満州国の建設に携わるか、携わろうとしていて、敗戦となったわけだが、当時、それをどう受け止めたか。

藤森 建国大学での学生時代、最初に朝鮮人の学生がつかかって来た。「おい、藤森、日本が朝鮮でなにやってるか、知ってるのか」という。こっちは知るわけがない。すると向こうは「そうか、現実ってのはそんなもんか」。彼は最後には「お前はばかだな」ときた。なぜなら日本人はすぐ本心をしゃべるからだという。しかし、彼らはそうではない。だから「お前はばかだな」となる。2人の漢族の学生とは随分話をした。するとこちらは本気で民族協和で建設を、と思っけていても、現実にはなかなか簡単でないということがわかってくる。向こうも「お前の気持はわかった。とにかく



創立当初の建国大学校門

お前だけは信用しよう」というところまではくる。そんな間柄にはなった。友達というよりは同志と言えるようなところまでにはなった。

ところが昭和16年、太平洋戦争が始まると雰囲気が変わると変わった。五族協和による建設の舞台から太平洋戦争への兵站基地へと満州の役割が変わった。

一方、中国人学生は口にははっきり出さなかったが、太平洋戦争が始まったことで、日本は負けると信じたようだった。昭和17年の3月に漢族の学生が18人検挙された。その中には最も激論を闘わせた2人の同級生のうちの1人、閻君が含まれていた。国民党の黨員か、あるいはそのシンパであるとして。彼らは裁判にかけられてそれぞれ懲役刑を受けて、終戦まで獄中にいたと思う。

われわれは敗けるとまでは思わなかった。何とか頑張ればいけるんじゃないか、という気持だった。初志貫徹でやるしかない、と。

長戸 藤森さんの建国大学とわれわれの大同学院とは随分ちがう。非常に短期間だし、満系（満州人）、鮮系（朝鮮人）という言葉を使っていたが、そういう学生たちは日本に留学したものが多かったのだ、日本のことをよくわかっていた。だからあまり議論にはならなかった。

戦後、われわれの同期生で消息を取り合っているが、満系の友人で文科系の人たちは絶えて消息がない。おそらく戦後、漢奸として消されたのではあるまいか。

大同学院の空気は牧民官、田舎へ行ってその農民と一緒に建設して行こう、

搾取している匪賊などを追っ払って、いい国を造ろうということだった。中央官庁へは就職したくない。現場へ行こうということだったが、私は事情があったが、経済部へ入った。

太平洋戦争が始まると、それをバックアップしようということ、食糧や鉄、石炭を増産したが、おかげでそれらが民生のほうには回らなくなった。これは残念だった。

終戦の時は、来るものが来たという感じだった。いろいろな情報を聞いていたので、仕方がないという受け止め方だった。8月12日にわれわれは新京防衛隊を作るといつて集められたが、なぜかそれはすぐに解散となった。私は家内と家内の叔母を通化へ疎開させて、結局、別々に引揚げたのだが、新京に残った私は身寄りのない日本人の子ども四人を預かった。子どもたちは煙草を売っていたが、ある日「売れた、売れた」と言って喜んで帰ってきた。ところがみると、売った代金は全部、共産党の軍票だった。共産党は直後にいなくなり、後へ国民党が入ってきた。共産党の軍票は全然お金に



大同学院正面

ならなかった。

私はその子どもたちを連れて引揚げて来た。葫蘆島で乗った引揚船はなんと浦賀に着いた。そして子どもたちの郷里、広島の尾道の近くまで連れて行った。お爺さんとお婆さんが迎えてくれたが、「両親はどうしたんだ」と聞かれて、私は声が出なかった。可哀想だった。

藤森 私たちはハルビンで武装解除され、その後、牡丹江に連れて行かれ、9月7日だったか、ソ連軍に「皆さんはウラジオストック経由で日本へ帰します」と言われた。ほっとしたが、同時に「民間人を含め何十万人もを一度に帰すことは無理なので、ウラジオストクの近く

で待機してもらいます。ただ帰国まで漫然と食糧の配給を続けることはできないので、少し働いてもらいます」とも言われた。兵隊1000人単位の作業大隊を作って、歩いてウラジオストクの近くまで行った。半月近くかかった。汽車は動いていたが、北へ向かう貨車には満州で略奪した物資が満載されていた。中には襖や畳まで積んでいる貨車もあった。そして忘れもしない9月18日に綏芬河で国境を越えてロシアに入った。

そして23日、満月の夜だったが、アメリカの援助物資であるフォードのトラックに乗せられて北へ向い、着いたところはウラジオストクの北東250キロくらいの山の中だった。そこで2年ちょっと伐採をやらされた。宿舎には3個中隊、750人がいたが、われわれの宿舎の糧秣係のロシア人の下士官が食糧を横流ししたために、ただでさえ食うや食わずなのにますます食い物が減り、始めの冬には750人のうち108人が死んだ。アメーバ赤痢が流行ったこともあったが、食糧の絶対的不足が原因だ。

民間の人々、とくに開拓団の人たちの苦勞を思うと、われわれはともかく仲間と一緒にいられるのだから我慢しなければと思っただが、国を守るべき関東軍がこ

んなことになってと情けなかった。

古海 安東から新京へ戻ると、わが家はロシアの将校の宿舎となっていた。それで暖房の石炭にも困らなかったし、強盗も入らなかったが、彼らが交代する都度、家財を持って行かれた。その後、国民党軍が来た時には家を追い出されたとかいろいろあったけれど、北満から苦労して逃げてきた人たちに比べれば恵まれていたことは間違いない。

——満州での体験はその後の自分にどんな形で残っているか。

古海 満州国は日本の大陸政策による植民地支配だとか、侵略だとかのネガティブな評価である。さらに戦争末期から戦後にかけて、日本人民間人からも開拓団を中心に17万人といわれる犠牲者が出てしまった。これらは人生の過程で折りにふれて意識することとなった。一方で、生まれ育ったところだからそれなりの郷愁はあるし、若い人たちが国づくりに情熱をもっていったことの記憶もあれば、新京の都市計画や疾走する特急亜細亜号などのポジティブな面の記憶も残っている。さらに戦後、社会人になってか



新京（現・長春）の都市計画

らは、中国人や中国人家庭との親しい付き合いも生まれた。こういういろいろな体験が絡まった、簡単には言えない意識を抱えてやってきたという感じだ。

馬場 敗戦後は、狭いところに大勢で暮らしていたけれど、水道が止まったり、停電したりということは全くなかった。恵まれていた方といえよう。日本へ帰っ

てきたら、年中、停電する。驚いた。

古海 停電がなかったのは新京も同じだ。国はなくなってしまったのに、電気は来る。料金は誰も取りに来ない。どうしてかという、私が調べた限りでは現場で働く日本人の使命感のなせるわざとしか言いようがない。

馬場 満州での体験が残っているというより、岡山の山の中に引揚げて来てからの苦労のほうがよっぽど大変だった。

最後に行ったチチハルに昔の仲間と観光旅行に行った時、そのうちの1人は「私たちが死んだら、こんなところに観光に来る日本人はいなくなってしまうのでは」と本気で心配していた。あの場所に対する愛情は確かにある。

植民地だったと言われればそうだが、子どもにはそれはわからなかった。身近かなボーイさんや水汲みのおじさんはよくやってくれたし、八百屋のおばさんも親切だった。すぐく住みやすかった。そこから自然に生まれた中国に対する気持ち、愛情は生きている限り消えないと思う。

橋本 私は12歳まで満州国で育ったが、満州国はその名の通り豊かな国で

あったと思う。大豆、とうもろこし、じゃがいも、高粱など穀物は豊富であったし、豊満ダムなども川幅も広く水量も豊富であり、石炭、塩などの鉱物資源も豊かであった。これに対し、昭和18年に帰国した際、いとこたちに「何が欲しいか」と質問したら、「ご飯とお餅」という答えが返ってきた時はびっくりした。すでに物資は不足していた。日本の田舎の子どもたちは知識はあったが、貧しかった。鉄道も満鉄の広軌に対して、日本の国鉄は狭軌であったし、国鉄の貨車は満鉄の貨車の3分の1の大きさしかなかった。道路幅も狭い。

私は大陸の気候のもとで育ったので、湿気が苦手、大陸的といわれるかもしれないが、ゆったりと世情に流されることなく生きたい。激動の時代を体験したから、よけいにそう思うのかもしれない。

満州にいたからこそ日本を知ることができたのだと思う。資源国満州を失い、焼け野原となった日本は経済立国を推進し、経済大国として復興したが、今後は世界的規模で展望する力が必要とされる。これからは積極的に外国に出て、外から日本を見ることにより日本を知る必要があると思う。

八島 延寿県での昭和21年の正月は平穩だった。家でお菓子を作って売ったり、煙草を売ったりしていた。ところが朝鮮人民義勇軍が入ってきて、誰か日本人の事を内通したらしく、父が捕まった。それからわが家の生活は一変した。5月の端午の節句に父に食べ物を持って面会に行った。ところが数日して行ったら、お前の父親はハルビンに送ったと言われた。それを最後に父のことは一切わからなくなった。

それで母とハルビンに出た。ハルビンでも何も分からず、やむなく母と長春（新京）に行つて収容所に入った。そこで母は自殺した。そして3人の孤児の間と一緒に10月に帰国し、母の遺書を持って母方の伯母のところへ行った。

その後はいろいろあったが、ジャイカ（JICA）に入つて、1980年頃から中国との政府間の協力が始まり、それにずーっと携わるようになった。振り返ってみると、中国にいたことが私の生涯を決めたし、70年代の終わりから始まった中国の改革・開放による発展を手伝うことになったのは運命としか言いようがない。あと何年生きるか分からないが、死んだら両親が中国に埋まっている

から、遺骨の半分は向こうに散骨してもらいたいと願っている。

長戸 足掛け5年の満州生活だったが、それは私の生涯に大きく影響している。今、特に思うのは満州国の建設に携わって亡くなった方々、特に終戦時に処刑された人たちのことだ。その人たちを思うと、満州侵略の一言で片づけられるのは残念でならない。私は生涯、侵略ではなかったと語り伝えていきたい。日口戦争を日本が戦わなかったら、満州も朝鮮もロシアのものになっていたかもしれない。そういうことを考えて欲しい。柳条湖事件は確かに日本がやったものにして、その後の戦争の経過を全部考えてみると、一概に侵略だというのはおかしいと思っっている。

藤森 相手の立場に立って考えることが重要だと思う、難しいが。昔、漢族の学生と随分議論した。「お前が中国人だったらどう考える」と向こうが言えば、こちらは「お前が日本人だったらどうする」というふうには。お互いに相手の立場、心情を考えなければものごとは解決しない。

歴史にイフはないとしても、シナ事変

などという馬鹿な戦争をしなかったらどうなっていたか、大東亜戦争みたいな無鉄砲な戦争をしないで、そのためにはこちららは頭を下げて我慢しなければならなかったろうが、それに耐えて満州国の建設を続けていたら満州国はどうなったか。日本人の横暴ということも確かにあった。しかし、それは一部の人間のことだと思う。関東軍の考え方で満州国を作るといって考え方の間には明らかに差があった。だから戦争がなかったら、決して西洋流の植民地にはなっていないかと思う、願望を半分含めての話だが。さつき馬場さんは外国人ということになにも意識しなかったと言ったが、そういう人たちがあのまま育っていったら、いい国になっていたと思う。

古海 満州にいて、あつという間に国がつぶれる経験をした。帰ってきた日本は焼け野原。そこからの復興だった。また何回かの外国暮らしからも、国というものについて考えることが多い。国民にとって、国がいろいろの意味でしっかりしていることが重要だ。その、国の将来像について、日本はどうすべきかの掘り下げが十分に行われていないと思う。戦後の成功の果実を食いつぶしながら、山

積する問題への危機意識が強くない、それが大きな問題だと感じている。

—ありがとうございます。

出席者略歴（発言順）

長戸紀次郎 大正9年2月 名古屋生まれ

昭和16年3月 名古屋高等商業学校卒業

同 16年4月 満州国総務庁高等官試験・大同学院入学・11月 同卒業

同 16年12月 満州国經濟部金融司勤務

同 20年8月 終戦

同 23年5月 (株)高千穂通信機具製作所〔現(株)タカコム〕入社

同 55年4月 同社副社長

同 63年5月 退社

藤森孝一 大正10年5月 長野県諏訪市生まれ

昭和14年3月 長野県諏訪中学卒業

同 14年4月 建国大学入学（2期生）

同 16年12月 同校前期卒業

同 17年1月 同校後期経済学科入学

同 18年12月 同校仮卒業、学徒動員により関東軍入隊

同 20年8月 終戦、武装解除後、ソ連抑留

同 22年10月 シベリアより復員復員後は農業を経て会社経営など

古海建一 昭和8年7月 旧満州国新京生まれ

昭和31年3月 東京大学法学部卒業、東京銀行

入行

同 61年4月 常務取締役

同 63年6月 ユアサ産業（株）取締役副社長

平成5年5月 国際善隣協会理事

同 17年5月 同理事長

著書『外国為替入門』（平成2年 日本経済新聞社刊）

八島継男 昭和9年2月 旧満州国奉天生まれ

昭和39年3月 東大文学部中国文学科卒業 海外協力事業団に

平成4年 国際協力事業団を退職

同 12年 国際善隣協会理事

現在、中日友好環境保護センター顧問など

橋本公佑 昭和9年3月 旧満州国新京生まれ

昭和33年3月 早稲田大学第一理工学部卒業

同 62年1月 同総本店技術特許主任 竹中工務店入社

平成4年 工業所有権協力センターに出向

馬場永子 昭和11年1月 旧満州国吉林生まれ

終戦後引揚げ

岡山県勝田郡梶並中学校卒 洋裁学校卒 婦人服店経営